

國分 郁子

Yuko KOKUBUN



1982年 千葉県生まれ

2010年 東京藝術大学大学院美術研究科修士課程 美術解剖学研究室卒業

2008年 東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻卒業

2004年 多摩美術大学美術学部造形表現学科中途退学

yukokokubun@gmail.com

Website: yukokokubun.com

【個展】

- 2019年 パラノイア協奏曲 (TS4312、東京、日本)
- 2017年 すばらしい新世界／Brave New World (TS4312、東京、日本)
- 2016年 Melting Island (ギャラリー檜、東京、日本)
- 2012年 MISSING SURVIVOR (ギャラリー檜、東京、日本)

【グループ展】

- 2018年 月下の果実曾 (画廊香月、東京)
- ART in PARK HOTEL TOKYO 2018 (画廊香月、東京、日本)
- 2015年 UNKNOWN ASIA/大阪 (大阪中央公会堂、大阪、日本)
- New Arts Prospect from Japan (Ashok Jain Gallery、ニューヨーク、アメリカ)
- 2014年 East-West Art Award 2014 (La Galleria、ロンドン、イギリス)
- Celeste Prize finalist exhibition 2014 (Assab One、ミラノ、イタリア)
- 2013年 East-West Art Award 2013 (La Galleria、ロンドン、イギリス)
- 第十六回岡本太郎現代芸術賞展 (神奈川県立川崎市岡本太郎美術館、神奈川、日本)
- 2012年 Art-Shopping 2012 (ルーブル美術館 地下1階 カルーセル、パリ、フランス)
- 2010年 美ナビ展 (森アーツセンターギャラリー、東京、日本)
- EYE OF GYRE (表参道GYRE、東京、日本)
- 2009年 美術解剖学展 vol.2 (ギャラリー ルデコ、東京、日本)
- 美術解剖学展 vol.3 (芸大上野校地、東京、日本)
- EYE OF GYRE (表参道GYRE、東京、日本)
- 2008年 美術解剖学展 vol.1 (芸大上野校地、東京、日本)
- 2005年 サスティナブル アートプロジェクト (台東区立旧坂本小学校、東京、日本)

【舞台・パフォーマンス】

- 2013年 第十六回岡本太郎現代芸術賞展 (川崎市岡本太郎美術館、神奈川、日本)
- 2007年 電話局からウクレレ (十条Cafe Galleryリトルコ、東京、日本／出演)
- モールス (旧木村石材工場、群馬、日本／作・演出・衣裳) ※わたらせアートプロジェクト参加作品
- 2006年 オマツリ (足尾駅ホーム、栃木、日本／制作・衣裳) ※わたらせアートプロジェクト参加作品
- 2005年 Yellow elevator (スタジオIWATO、東京、日本／出演)
- 2004年 穴蔵45° (スタジオSAI、東京、日本／作・出演・制作) ※ソロ公演

【受賞】

- 2013年 第十六回岡本太郎現代芸術賞 入選
- East-West Art Award 2013 Contemporary-II 2nd Place Category Prize

【Artist-in-residence program】

- 2014年 EWAAC SUMMER WORKSHOP UK (ルートン、イギリス)

【オープンスタジオ】

- 2019年 KODAI OPEN STUDIO (スタジオ航大、茨城)
- 2017年 水中のパレード (元レストランじんで、千葉)

[講義・登壇]

2016年 7月 「アーティストの仕事について ～宇宙卵を作ってみようWS～」 跡見女子大学
12月 「サーカスにおける衣装とキャラクター ～二項対立が生み出すドラマ～」 跡見女子大学
12月 「世界を再構成する ～いまここにあるもので物語を作る～」 跡見女子大学

[キュレーション]

2016年 茨城県北芸術祭 KENPOKU ART 2016 (キュレトリアルアシスタント)

[プレス・出版物]

2016年 「ひたち vol.82」 インタビュー、19P、2016年9月号
2014年 「三菱商事アートゲートプログラム オークションカタログvol.22」 インタビュー
2013年 「第16回岡本太郎現代芸術賞展」 カタログ
2002年 「映画 あしがらさん」 ポスター・カタログ等出版物のイラストレーション

[ステートメント]

「地球劇場」をコンセプトに、人間/生物間、あるいは生物単体そのものの内部で起るドラマを演劇的解釈に置き換え絵画作品に落とし込んでいる。

演劇的な視覚芸術への置き換えとして採用している方法は、サーカスにおけるコラージュ的見せ方（意味／無意味の貼り合わせ）である。切り刻まれた生物のあらゆる形が、偶像に見立てて再構成され、ステージのような奥行き狭い空間にオブジェのように配置されている。これらの作品にみられる切り刻む行為は、ある種の解剖である。部位から意味を取り除き、形状の可能性を観察し、形と色だけになったものを古典美術や工芸、宗教美術などで築かれてきた様式美の部品として再構成することで、意味や役目から解放された形そのものに荘厳さを与えているのである。この解剖学的コラージュは、様々な人種・文化を縦横無尽に組み合わせ、ステージに立つあらゆる者の存在を肯定する祝祭性によって発展してきたサーカスという仕組みを引用する行為であり、この世界が内包する遊びと命の掛け合わせをしているのである。

作品の背景に多く見られる網目のような柄は、大量生産された加工皮や、あるいは動物の皮や農作用のネットに自ら加工をほどこし、スキャンによってコンピューターに取り込んだあと、さらに画像加工ソフトでパターンを繰り返したり、柄のリズムを変形させたり、色彩調整を行っている。

これには、二つの理由がある。

一つめは、知覚心理学者のジェームズ・ギブソンの言う「視覚的肌理」を明確にする意図で用いている。この世界はどこまでも多種多様な何かしら(大地、水、木、コンクリート、生き物など)の「肌理」が続いており、その物質の連続の中に我々はいる。その肌理、もっと言えば入れ子状に重なり存在する肌理が子宮のようにわたしたちを包括している状況を視覚的にわかりやすくしている。

二つめは、生き物の皮膚の柄が加工されコピーとして繰り返し用いられ、原型から似ていながらも離れていく過程を生物の進化、あるいは生命伝承になぞらえている。

自然や生命をコントロールしたいという人間の欲求は科学技術の発展とともに進み続けるだろう。

私は地球のドラマツルギーを提示することによって、人間主観の「生命/生物」という認識に変化を与え、人間の存在のあり方自体を見直したいと考える。

[Paranoia concerto] Solo exhibition statement

パラノイアとは、過度なストレスなどにより不安や恐怖を強く受け、他人が常に自分を批判しているなどの被害的、あるいは自分は常人とは違うという誇大的、または恋愛などの妄想を抱いている精神疾患の一つである。妄想を抱いているという点以外では人格や職業能力面において常人と変わらない点が特徴であり、さらには、パラノイアは単なる病的な異常ではなく、すべての人間の意識の奥底にひそむものなのである。

本展は、劇作家 野田秀樹氏が書いた戯曲「売り言葉」に着想を得て、一人の狂っていくおんなをモチーフにし、構成している。この戯曲は、女優一人芝居の作品であり、高村光太郎が妻 智恵子をもとに書いた「智恵子抄」という愛の傑作詩集によって、世の中が思う「智恵子」像と自己との乖離に苦しむ本人である智恵子が、統合失調症を深めながら死を迎える... という実話をもとにした物語である。この戯曲で興味深い点は、精神を病んでいく智恵子は脳内で人格を分離させ、夫 光太郎への不満や醜い部分を「女中」というもう一人の自分に言わせ、高潔で理想的な自己を保とうとする点。作中、徐々に「女中」の存在が肥大し精神が蝕まれていく様子は、喜怒哀楽を持ち、他者との関係の中で生きている人間にとってこの葛藤は永遠に避けることができないものであり、それと同時に、この葛藤を抱える人間同士の関係がきれいな正円であり続けるわけではない悲しさを物語っている。

人は誰も他者と接するなかで、不安、恐怖、嫉妬、憤怒、欲望、孤独、劣等感など抑えられない感情と出会うだろう。その抑えられない感情は、声・言葉・表情・身振りという演劇的な表現手段を武器にし、目に見えない血を、相手に流させるかもしれない。そして誰一人例外はなく、目に見えない血を流し流させるパズルの1ピースなのだろう。

強弱を伴ったストレスは私たちの神経に正常と異常の間のグレーゾーンを往来することを強い、そして芽生えた異常性は、バタフライ効果のように広がり、個人という一つの個体から、個人の集合である一つの組織へ、その集合である一つの国という単位にさえ、影響をもたらすのではないだろうか。

ピアノッシモとフォルテッシモに鳴り響くストレスの間をさまよい続けるフラジャイルな私たちのドラマは、今日もパラノイアのメロディを奏でている。

本展では、一人の人間をベースにしなが、人間関係の軋轢によって歪んでいく群衆（家族や他者間）を擬人化したり、または一場面として描き、作品ごとにセリフを添えています。描いているシーンは、会場左回りに、「婚姻→異変→妊娠→いびつな関係→障害の明確な発症→生と死の対話→死」という構成にした。



この作品は戯曲のハイライトシーンである。精神疾患がピークになった主人公が、現実と内部の自分の認識ができなくなっている混乱と怒りの場面を表している。数ヶ月におよぶ長期入院を余儀なくされるほど統合失調症を重くなっても見舞いにこなかった光太郎が、智恵子の病状が末期になってようやく来訪した場面にあたる。彼女は光太郎に対し、混沌と怒りと不穏に満ちた自己ではなく、「智恵子抄」に書かれたような光太郎にとっての理想の女の姿で彼に接したという。

背景や床面の模様のパースを狂い秩序が壊れ、物が上面にのらないような傾斜になっている床面の状況は、世界が破綻とねじれに覆われ、どこまでも滑り落ちていく主人公の認知の歪みを表現している。

中央の赤い顔をした人型は主人公である。赤血球の顔、黒い毛細血管の集合でできた服から飛び出した内臓のような赤い突起物、体を硬質な金属物質と毛細状の柔らかく不気味な物質（極端に違う質感のもの）に囲まれ身動きできなくなっている状況は死を予感させている。静脈や管などさまざまな体内の部位を装飾具のように身につけ、人間としての最後の尊厳を誇示している。この臓器の装飾は、人間の尊厳の最後の抛りどころを表している。

パラノイア症候群
Collage, pen on paper
36 x19.5 cm
2019



受胎告知の庭
Collage, pen on paper
18 x18 cm
2019

中央にいる白黒の水玉の「何か」が二つの玉をもっている。これは古来の日本で忌み子として片方を殺してきた歴史のある双子を表している。柄服は西欧において異教徒を表す服飾の歴史があり、さらに、この絵の色彩構成はキリスト教の宗教画の色の意味を意図的に配置し、受胎した柄服の者を、慈愛の象徴の赤い人工的なオブジェにのせ、聖なる色である青を天と地に配置し、異教とされる者の命を人ではない人工物や自然環境が守っている様子である。異教混在で生きる現代～近未来のあり方を表現している。



擬態の庭
Collage, pen on paper
24 x19.5 cm
2019

いびつな形状の物同士が組み合わさり、中央の口から美しい緑の鉱石がパラパラと列をなして落ちていく。これは、人間が築くコミュニティのいびつさと、その結晶の美しさは比例しないことを表している。恋人、家族、会社など、人間は他者との関係をギクシャクさせたまま何かを生み出そうとする。そこでできあがったものは、客観的に見れば美しい物かもしれないが、生まれた途端に地面向い、水たまりに溶けてしまうようなフラジャイルなものなのではないだろうか。

[Paranoia concerto]



花嫁の鉱石
Collage, pen on paper
28 x 19.5 cm
2019



運動と拘束
Collage, pen on paper
39.6 x 25 cm
2019



パラノイア散楽像
Collage, pen on paper
20.3 x 13.6 cm
2019

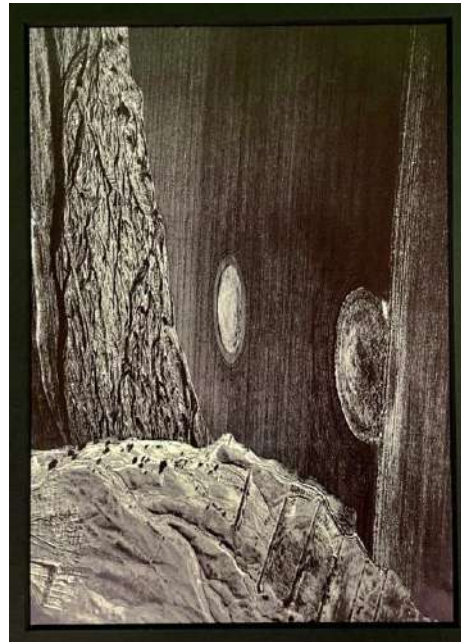
[Paranoia concerto]



誰もない遊戯場
24 x X 17 cm
Collage on paper
2019



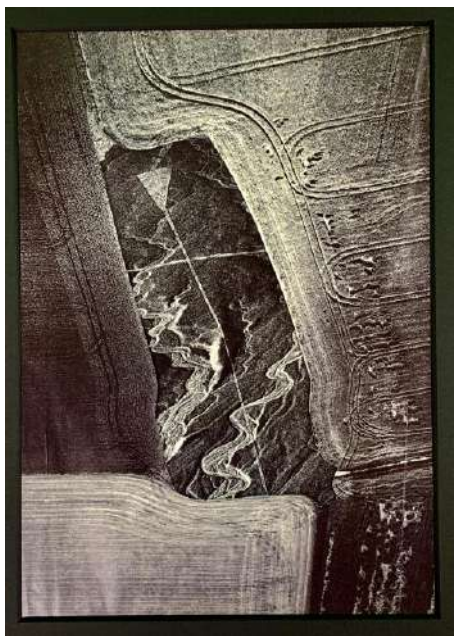
誰もない遊戯場
24 x X 17 cm
Collage on paper
2019



誰もない遊戯場
24 x X 17 cm
Collage on paper
2019



誰もない遊戯場
24 x X 17 cm
Collage on paper
2019



誰もない遊戯場
24 x X 17 cm
Collage on paper
2019



誰もない遊戯場
24 x X 17 cm
Collage on paper
2019

[Paranoia concerto]



誰もいない遊戯場
17 x X 24 cm
Collage on paper
2019



誰もいない遊戯場
17 x X 24 cm
Collage on paper
2019



無題
12.7 x X 15.4 cm
Acrylic, pen, pencil, watercolor, collage on paper
2019

[Brave New World] Solo exhibition



Scean1:

監視し合う四つの構造物
Acrylic, oil on canvas
52.5 x 65 cm
2017



Scean2:

飛行物体追突
Acrylic, oil on canvas
40 x 40 cm
2017



Scean3:

構造の解体は金色の滝をうむ
Acrylic, oil on canvas
53 x 92 cm
2017

Scean4: Release of animals and plants



浮遊泳

Acrylic, oil on canvas

18.5 x 60 cm

2017

オルダス・ハクスリーによるディストピア小説「すばらしい新世界」にヒントを得て制作したシリーズ。

互いを監視し合う人工物が自然災害によって崩壊し、地殻変動で新たな生態系をもつことになった地球上には、その環境に適した新たな身体機能をもった生物が溢れるという物語。

合計9枚の絵画作品の時間軸は、「夜→暁→日の出→昼」となっており、各作品の色彩設計もその時間とわかる配色にしている。構図には、伊藤若冲や歌川国芳といった日本の画家の平面的強さをういながら、描写の陰影や色のバルル配置は西洋絵画の立体的な描き方の技術を採用し、絵画文化を渾然一体とさせている。

この作品は、新しい自然環境になった地球に適合するように形態進化を遂げた生物のシーンである。

Scean4: Release of animals and plants



朝光の岩場にひそむ者
Acrylic, oil on canvas
40 x 40 cm
2017



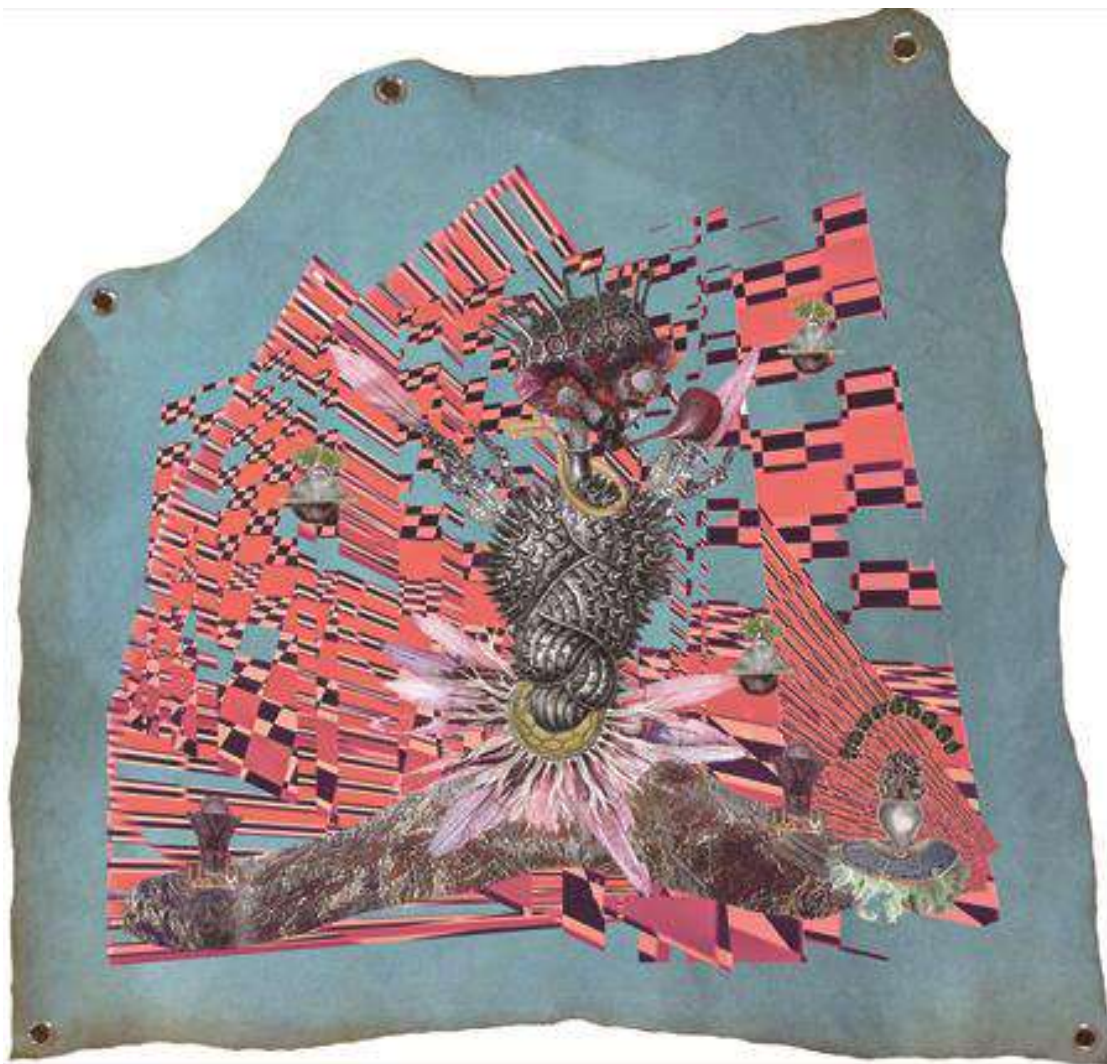
双鳥の音楽
Acrylic, oil on canvas
40 x 40 cm
2017



枯れ木の演舞
Acrylic, oil on canvas
40 x 40 cm
2017



漂流
Acrylic, oil on canvas
40 x 40 cm
2017



カニス・デメンスはすべての朝にする
 Leather(cow), oil, pen, UV direct sign print, grommet and wire
 119×125cm over / Dimensions variable (wire installation)
 2013

タイトルの「カニス・デメンス」とは、哲学者の丸山圭三郎が「錯乱する犬」という意味で用いた言葉です。私は、この錯乱する犬という言葉は、世界のあり方一変させるポジティブな意味での異者たる存在の代名詞なのではないかと考えました。どの時代をみても、錯乱する犬のような排除すべき者に見える異者によって世界は大きな変化を遂げてきた面があるでしょう。時代や社会を暗黒にした事件や人物の多くはマジョリティの産物であると考えた時、行き詰ったマジョリティに変革をもたらせるのは、彼らとはそもそもの思考システムとは違う者であり、それは比喻として世界を朝にするといえるでしょう。

描かれている奇怪な姿のキャラクターは様々な動植物の部位をパズルのように組み合わせてできています。舞台がもつ「祝祭性」を用いて、どのような姿をもった生き物もその命を肯定されるという生命賛美を現しています。



閉じられた単眼のリハーサル

Leather(cow), oil, pen, UV direct sign print, grommet and wire
115×108cm over / Dimensions variable (wire installation)
2013



酔狂の蜜は真昼のさなかに

Leather(cow), oil, pen, UV direct sign print, grommet and wire
108×122cm over / Dimensions variable (wire installation)
2013



ソフィアは一睡もしない

Leather(cow), oil, pen, UV direct sign print, grommet and wire
120×134cm over / Dimensions variable (wire installation)
2013



ヘラクレス培養装置I
-覇者は星の実をたべる-
Acrylic, oil and pen on paper
67cm×25cm
2013



ヘラクレス培養装置II
-鎧となった兵士-
Acrylic, oil and pen on paper
67cm×25cm
2013



ヘラクレス培養装置III
-遊戯は羽をかなたへ運ぶ-
Acrylic, oil and pen on paper
67cm×25cm
2013



ヘラクレス培養装置IV
-快樂のコトバはかごの中-
Acrylic, oil and pen on paper
67cm×25cm
2013



欠損の尋問

Leather(cow), oil, pen, UV direct
sign print, Grommet, wire
66.5×53cm
2013



保有核ドレス

Leather(cow), oil, pen, UV direct
sign print, Grommet, wire
66.5×53cm
2013



保有装置

Leather(cow), oil, pen, UV direct
sign print, Grommet, wire
66.5×53cm
2013



脈トラップ

Leather(cow), oil, pen, UV direct
sign print, Grommet, wire
66.5×53cm
2013



幕内暖炉

Leather(cow), oil, pen, UV direct
sign print, Grommet, wire
66.5×53cm
2013



マルスの菌糸II

Leather(cow), oil, pen, UV direct
sign print, Grommet, wire
66.5×53cm
2013



ヤドリギにバランス鳥
Acrylic, Water color, pen and pencil on paper
31.8 × 22.8cm
2013



ヤドリギにバランス鳥
Collage, digital print on paper
31.8 × 22.8cm
2013



コルセット
Digital collage
2019



葉虫
Digital collage
2019



水中のパレード
Acrylic, oil on canvas
131 x 193 cm 2018



Melting land
Acrylic, oil on canvas
40 x 40 cm 2018



Melting land
Acrylic, oil on canvas
40 x 40 cm 2018



Melting land
Oil on canvas
20 x 20 cm 2015



Melting land
Oil on canvas
20 x 20 cm 2015



菓旋卵

Kasen-ran

Water color, pen, pencil, colored
pencil and collage on paper
40 x 30cm
2010



雫吸卵

Kakyu-ran

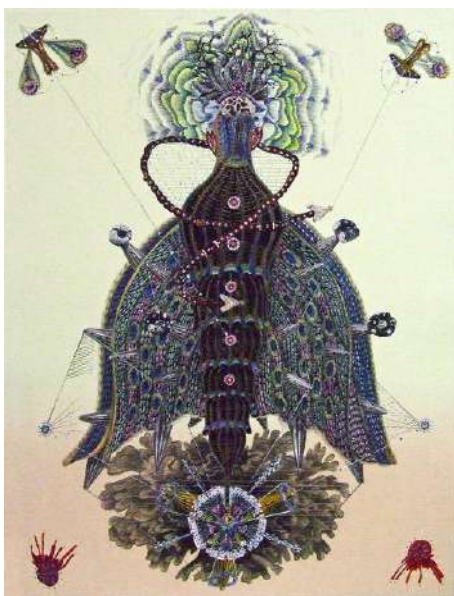
Water color, pen, pencil, colored
pencil and collage on paper
40 x 30cm
2010



袋灯卵

Hohtoh-ran

Water color, pen, pencil, colored
pencil and collage on paper
40 x 30cm
2011



羽城卵

Ujoh-ran

Water color, pen, pencil, colored
pencil and collage on paper
40 x 30cm
2012



兵謡卵

Heiyoh-ran

Water color, pen, pencil, colored
pencil and collage on paper
40 x 30cm
2012



包華卵

Houka-ran

Water color, pen, pencil, colored
pencil and collage on paper
40 x 30cm
2011



養郭卵

Yohkaku-ran

Water color, pen, pencil, colored
pencil and collage on paper

40 x 30cm

2009



夕潤卵

Yujun-ran

Water color, pen, pencil, colored
pencil and collage on paper

40 x 30cm

2009



竿蒸卵

Kanjoh-ran

Water color, pen, pencil, colored
pencil and collage on paper

40 x 30cm

2012



波想卵

Hasoh-ran

Water color, pen, pencil, colored
pencil and collage on paper

40 x 30cm

2009



爬脱卵

Hadatsu-ran

Water color, pen, pencil, colored
pencil and collage on paper

40 x 30cm

2010



華舞卵

Kabu-ran

Water color, pen, pencil, colored
pencil and collage on paper

40 x 30cm

2009